ボクちゃんがないた日

新田祐一
絵　二俣英五郎

ボクちゃんがないた日

新田祐一・作
二俣英五郎・絵

講談社

913
新田祐一
ボクちゃんがないた日
講談社　1974
150p　22cm
（児童文学創作シリーズ）
にった　すけかず

ボクちゃんがないた日

昭和49年1月20日　第1刷
昭和49年　第3刷（L）

著　者　新田祐一（にったすけかず）
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話　東京03(945)1111(大代表)
振替　東京3930
製　版　株式会社　まゆら美研
印刷所　豊国オフセット株式会社
双美印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

© 新田祐一　1974　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
定価は箱に表示してあります。　（児1）

ボクちゃんがないた日

もくじ

第一章　くらい毎日……4
第二章　ボクちゃん……19
第三章　無音の世界……45
第四章　ことばとのたたかい……71
第五章　召集令状……99
第六章　心と心……112
あとがき……142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　くらい毎日

1

昭和十九（一九四四）年、日本はどんぞこの状態でした。太平洋戦争はだんだんひどくなって、日本の敗戦は、はっきりしてきました。

けれども、軍は一般の人たちに、真実を知らせようとはしませんでした。国民が戦意をうしなってしまうことをおそれたからです。そのため、戦争がどうすすんでいるのか、国民はさっぱりわかりませんでした。

生活にひつような品物や、食べるものが、だんだんすくなくなって、みんな不安に思っていました。

わたしは、東京の銀座で呉服屋をやっていましたが、商品がなくなり、政府から命令された配給品だけを売るようになってしまいました。男の店員たちは、兵隊にとられたり、兵器をつくる工場へつれていかれ、女の店員たちは、アメリカ軍の空襲が毎日のようにあるため、店へかようことができず、だんだんやめてしまいました。わたしは、ほそぼそと商売をつづけていくよりしかたがありませんでした。

わたしは、毎日毎日、くらい気持ちで考えこんでいました。そんなとき、心をなぐさめてくれたのは、一ぴきのシェパードだったのです。

人間の食べるものすらとぼしくなっていた時代ですから、いぬを飼っている人たちは、いぬにあたえる食べ物には、ずいぶんこまっていました。あるいぬは、飼い主にすてられてのらいぬになり、また、あるいぬは、注射や毒薬でころされました。

わたしは、自分のシェパードだけは、どうしても手ばなす気になれず、

食べ物を手に入れるには、とてもくろうしていたのです。

そんなとき、ともだちが耳よりなことを話してくれました。

陸軍が軍用犬協会に力を入れて、いぬの食料を配給してくれるというのです。わたしはよろこんで、この話にとびつきました。

しかし、はげしい戦争のさいちゅうに、軍が理由もなく食料を配給するわけがありません。食料の配給をうけたいぬは、そのかわりに、しっかり軍事訓練をうけて、命令があれば、いつでも、いぬを軍にひきわたさなければなりませんでした。

いぬを戦争につかったのは、ずいぶんふるくからのことで、キリストの生まれる前といわれています。ギリシアやローマ時代には、軍馬とおなじように、うすい鉄製のよろいまでつけられ、たたかったということです。

しかし、いぬがもっとも戦争でかつやくしたのは、第一次世界大戦の

ときで、通信や警備などに、ひろくつかわれました。

第二次世界大戦でも、各国は、軍用犬をおおいに役だてました。日本の陸軍でも、軍用犬の訓練には努力していました。けれども、軍で飼っているいぬだけではたりなくなってしまい、家で飼っているいぬも利用しようということになったのです。

もともと、いぬの性質はおとなしく、しんぼうづよく、そのうえゆうかんですから、人間の命令にしたがうように訓練すれば、戦場ではいろいろと役にたつわけです。

しかし、きけんな戦場でいぬがつかわれれば、二度と生きて帰ることはできないでしょう。それでも、いぬに食べさせる食物がみんなの家にないのですから、おおぜいの人たちが軍用犬協会に入会したのでした。

わたしも、すぐに軍用犬協会にはいりました。そのうえ、呉服屋のしごとはすべて妻にまかせて、協会のしごとをてつだうことにしました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

軍用犬協会の事務所といっても、洋品店を改造したものです。ショーウィンドーは、爆撃のきけんがあるために、ガラスをはずしてベニヤ板をうちつけ、小さなまどをとりつけていました。かべはうすよごれ、ぬりのはげたつくえやいすも、ありあわせでした。当時は、物がない時代でしたから、これでがまんするよりしかたがありません。

事務員は、わたしのほかに、安藤くんと近所の女性二人の、ぜんぶで四人でした。

寒くなりはじめたある日、わたしたちは、軍から配給されるいろいろのいぬの食料を、会員たちに公平にわりあてるしごとをしていました。はんぱが出たりして、なかなかめんどうなしごとです。

わたしは、ちょうめんとそろばんと食料をにらみあわせて、わけるのに苦心していました。つかれた頭をやすめるつもりで、ふと、まどごしに外をながめますと、一人の男が思いなやんだ顔で、事務所の前をうろうろしているのが目にとまりました。

わたしは安藤くんに、

「だれか戸口のところをうろついているよ。どうしたんだろう。」

といいました。

安藤くんは、

「どうしてはいってこないのかなあ……。」

と、ぶつぶついいながら、外へ出ていったと思うと、すぐひきかえしてきて、

「山岸さん、あの人、ものがいえないんですよ。ろうあ者なんです。」

「へえ。」

わたしはおどろいて、外へ出てみました。なるほど、その人はものがいえないらしく、手ぶりでわたしに話しかけてきます。しかたがないので、わたしも手ぶりで、中にはいるようにいいました。

その人が吉田さんだったのです。

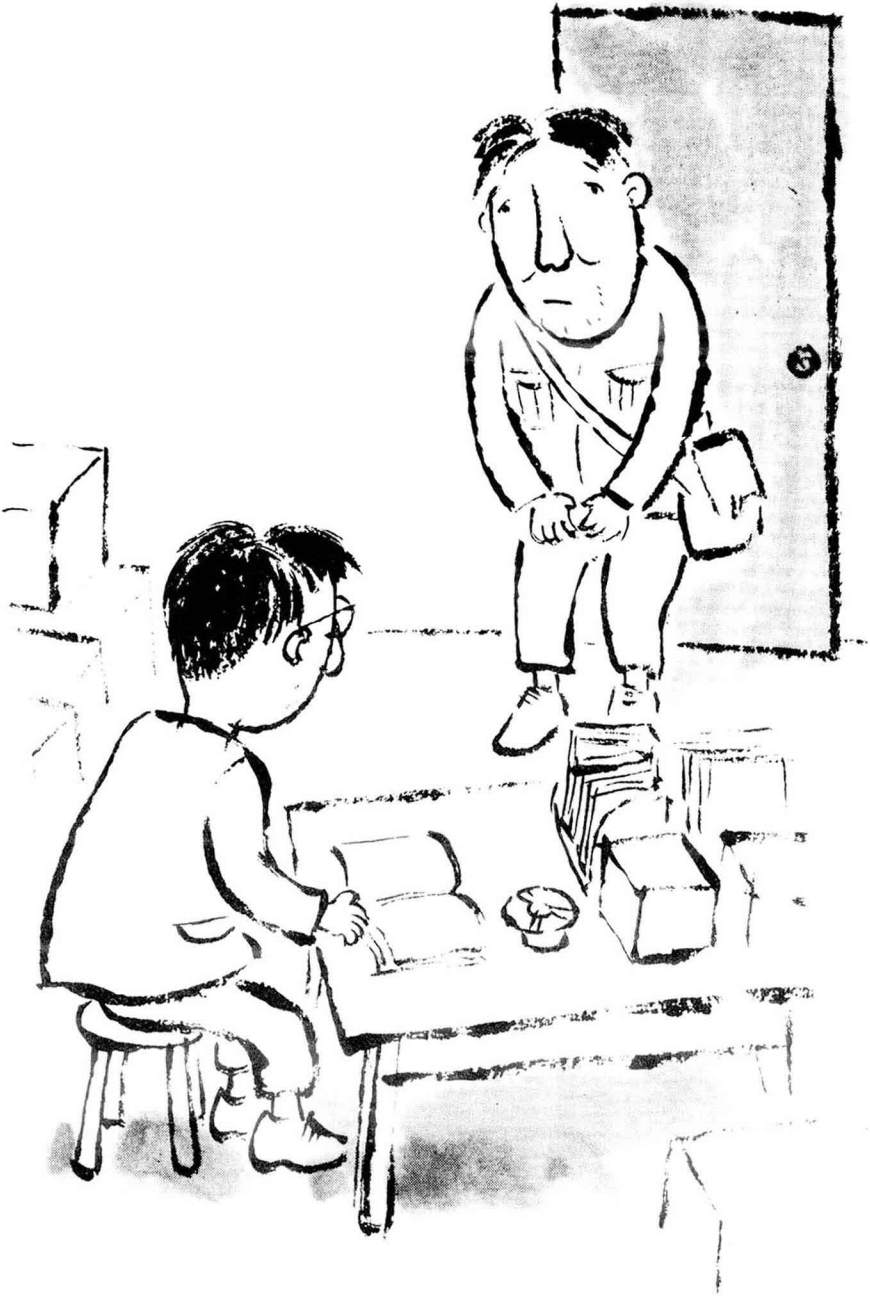
吉田さんは、その当時、みんながきていた茶かっ色の洋服をきて、防空ずきんをかた手にもっていました。

防空ずきんとは、空襲のきけんから頭をまもるためにつくられた、わた入れのずきんですが、戦争中は、みんなもってあるいたものです。

吉田さんは、事務所にはいってくるとすぐ、ポケットからノートをとり出し、えんぴつで、さらさらと文字を書きだしました。

こうして、わたしと吉田さんは、ノートとえんぴつをとおして会話をはじめたのです。

――ここで、いぬの食料をおせわねがえるのでしょうか。



——ええ、いぬによってはさしあげられます。

吉田さんは、ここでちょっと考えこみました。

それにしても、吉田さんの書いた文字は、じつにすなおで、うつくしく、おどろくほど書きかたがはやいのでした。

——どうしたら、いただけますか。

——まず、あなたのいぬが、軍用犬として適当であるとみとめられなければなりません。種類も、たとえばシェパード、エアデール＝テリア、ドーベルマン、ボクサーなどでなければいけません。それから、軍事訓練をうけているか、または、これからうけなければなりません。そのあとで、当協会へ入会の手続きをしてもらうことになります。

——入会の手続きは、どうすればいいのですか。

——この協会の規則書を読んで、申込書に、ひつようなことを書き入れたうえ、入会金をそえて申しこんでいただきます。

——どうもありがとうございました。その規則書をいただいていってもよろしいでしょうか。

——どうぞ、おもちかえりください。

ここで、わたしたちの筆談はおわりました。

わたしは、もっといろいろききたかったのですが、筆談のわずらわしさもあり、食料をわけるしごとものこっていたので、声のない会話をうちきりました。

吉田さんは何度も頭をさげて、はいってきたときとはうってかわって、元気な足どりで帰っていきました。

3

四、五日後、吉田さんはにこにこしながら、協会の事務所へあらわれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com